

竹島俊之氏のご逝去を悼む

古浦 敏生

平成 18 年 8 月 26 日、本学会会長で広島大学名誉教授、竹島俊之氏が食道癌のため逝去された。前年 3 月に定年退職されたばかりである。私よりも 3 歳年下の享年 65 歳、まだ逝くには早すぎる年齢であり、痛恨の極みである。

竹島氏は昭和 35 年 4 月、広島大学文学部言語学専攻にご入学。その後広島大学大学院文学研究科言語学専攻修士課程・博士課程に順次進学された。恩師より漏れ承ったところでは、大学入試の折、文学部受験生のうち最高の成績で合格されたそうである。

私も同じ専攻に所属していた関係上、学生時代から親しい間柄にある。ここでその頃のエピソードを一つ。それは広島市内の「たばこ会館」で研究室の忘年会が開催されたときのことであった。彼は不本意にも酔酩し、前後不覚になってしまった。同席していた私はほおってもおけず、後輩の原野昇氏と二人で彼を左右から抱え、下宿まで連れ帰った。途中、足元のふらつく竹島氏に何度となく脚を蹴飛ばされた記憶がある。

竹島氏は大学院を在学期間満了で退学され、広島商科大学（現広島修道大学）専任講師となられた。そして、昭和 45 年 6 月より翌年 10 月まで、ドイツ・ケルン大学古典学研究所に留学された。その後、昭和 50 年 4 月より広島修道大学助教授として、昭和 52 年より広島大学総合科学部助教授として、関本至広島大学文学部教授（本学会初代会長）の跡を継ぎ、文学部の「ギリシャ語文法」の授業を担当された。真面目で熱心な授業態度に共感を覚えた受講生も多い。彼の助教授時代の重要な業績として「ハラルト・ヴァインリヒ『時制論』・『言語とテキスト』」の共訳・出版（昭和 57 年 5 月と昭和 59 年 11 月、いずれも紀伊国屋書店）がある。

総合科学部には学部枠組みを超えた複数の教官が担当する「総合科目」という授業がある。その一環として平成 7 年度より竹島氏は「民族とことば」（前

期 15 コマ) を主催され、「民族とことば、そして、国家」・「ホメーロスの言語」・「現代ギリシア語はホメーロスの言語とどう関わっているか?」・「ゴート語と古高地ドイツ語」などを講じられた。私も「イタリア半島の民族と言語」と題して、彼が定年になられるまで、この授業を担当させていただいた。また、言語学研究室の博士課程後期の院生も非常勤講師としてこのメンバーに加えていただき、当時教室主任だった私にはとてもありがたかった。授業の始まる前に竹島教官室であたたかい紅茶をいただき、親しく話をすることができたのも楽しい思い出である。

平成 13 年 4 月、大学院文学研究科の改組に伴い、竹島氏は「言語応用文化学講座」の併任教授となられた。そして、「ヨーロッパ語比較構文論」・「新約聖書『ヨハネ伝』講読」・「トゥキュディデース『歴史』講読」などを講じられる傍ら、博士論文の審査にも数多く加わられた。

竹島氏の研究テーマは、『広島大学…人と研究(平成 14 年度)』によれば、「ゲルマン語・ギリシャ語の構文論対照研究」とある。しかし、何と言っても彼のライフワークは、ポリュビオス(紀元前 200 年頃～120 年頃)の歴史書『ヒストリアエ』の本邦初訳であった。膨大な分量のギリシャ語原文を平易な日本語に訳すことは大変なエネルギーを要する作業である。それは平成 16 年 11 月、東京の龍溪書舎から出版された「ポリュビオス『世界史』竹島俊之訳、第 I 巻」(全 568 ページの大著)として結実した。これには詳しい注・索引・ヘレニズム世界の地図も付され、学術的価値も高い。日ごろは温厚・冷静な竹島氏であったが、内に秘めたる闘志は並々ならぬものがあった。引き続き、第 II 巻・第 III 巻が出版される予定であったが、この間不幸にも癌に侵された。最後は、病院内に資料を持ち込み、迫り来る病魔との壮絶な戦いの結果、見事に訳されたと聞く。研究者の在るべき姿として、頭の下がる思いである。

思い出は尽きない。心よりご冥福をお祈りしたい。

編集部註：本追悼文は、本誌前号に掲載されたものを著者による加筆修正の上再掲載したものです。